

## 謡曲「通い小町」にパウンドが見出したもの\*

中 矢 美 紀

エズラ・パウンドは謡曲「通い小町」<sup>1)</sup>を、大胆に切り詰めた小詩として英米の読者に紹介した<sup>2)</sup>。そこではあらゆる飾りが省かれて、深草の少将の愛欲だけが浮き彫りされ、鬼気迫る美しさで読者の心に訴える哀切な作品となっている。

アイルランド方言を交えた<sup>3)</sup>平易で簡潔な英詩として展開し着した世界は、それだけにこの劇の中心的な主題を、より端的に表出しているのかもしれない。

パウンドの翻訳とオリジナルの謡曲<sup>4)</sup>とを比較・検討することによって、もともと、より複雑な要素を含んだ異国の古典から彼が抽出した普遍的な主題について考察してみたい。

現曲は「通い小町」となっているが、古くは「四位の少将」として知られるこの作品は、確かにシテとして登場する深草の少将を主人公とする劇である。

能における一般的なパタンの一つに、現世での殺生や悪業……多くの場合、獵すなごや漁り等によって糊口を凌いだ庶民であったり、戦乱の真っ只中にあった武士達ものふの物語であるのだが……によって科せられた罪に苦しみ、彼岸に渡ることを拒否された人々が成仏を願うことを基調にしたものがある。ところが、パウンドがわざわざ註を施し、又、一九六四年の更に新しい英訳の序文においてロイ・ティールも指摘している<sup>5)</sup>とおり、四位の少将は救われることを拒んで、どこまでもこの世に執着をみせるところが特異である。

たとえ現世に留まったところで、小野の小町の愛は少将からは未来永劫に失われていることは必定なのである。それなのに、又それだからこそ、どうしてもこの世に執着して離れられない彼の切迫した情念、小町への恋慕と怨恨を表現することが、この能のテーマとなっている。

オリジナルの劇では、夏安居<sup>げあんご</sup>として九十日間の修業中の僧（ワキ）のもとへ、若くて美しいが得体の知れない女（ツレ）が毎日木の実瓜木を布施に来る一場・序から物語は始められる。ここでは様々な懸詞や伝説や和歌をふまえた巧妙な木の実尽くしのやりとりが交わされる。この「木の実」は無論「この身」の縁語であって、僧は女の正体が小野の小町の亡霊であることに気付くのである。この場面のことば遊びの面白さはパウンドの翻訳からは殆ど窺い知ることが出来ない。しかしこれは、パウンドが原典としたものが、アーネスト・フェノロサが日本の知人に口頭で大意を説明してもらった聞き書きの草稿を、フェノロサ没後、その未亡人より託されたものであることを考えればいたしかたのないことであろう。

小町自身は成仏できることを願っており、僧は市原野に出掛けて行き、「…出離<sup>しゅつり</sup>生死<sup>しやうじ</sup>頓証<sup>とんしやう</sup>菩提<sup>ぼだい</sup>」と申うが、この場面（二場・破）で初めて「おそろしの姿」で現われるシテ・少将は浄土へ赴くことを望む余裕など全く持ち合わせていないのである。

それではパウンドの作品は、例えばドナルド・キーンの指導のもとにエイリーン・カトウが忠実に跡付けた英訳<sup>6)</sup>のある現在、只、能という芸術様式を欧米に紹介、導入した先鞭として歴史的にのみ評価されるべきものであろうか。

そうではあるまい。第一に、パウンドは深草の少将の心理的内面の葛藤に焦点を当ててそれを昇華してみせたのである。初めに述べたように、この貴公子の小町への恋の叶わぬ狂おしさの、それがために安楽浄土へ往生出来るようにと祈ってくれる僧のことばさえ、にべもなく否定してしまう煩惱熾烈な様が生々しくその筆に捉えられているのである。

第二に、更に僧が少将に百夜通いを真似んでみせることを請うことによって達せられる、現代的に解釈するならサイコセラピューティックな効果ともいうべきものに正に光が当てられているのであるから、「その凄ましい怨念は、繰り返し繰り返しまねび続けることによってしか解脱の道はないのである」<sup>7)</sup>と里井陸郎が述べている通りなのである。

人は、舞台上で真似てみせる百夜通いの凄惨さの中に、サイコセラピーにおけるサイコドラマの要素を容易に見て取るであろう。僧は百夜通いの再現を少将に迫ることによってセラピストの役割を演じ、それを見守る観客はこうして初めてカタルシスを得ることが出来るのである。尚、パウン

ドの抄訳というより彼独自の翻案といった方がいい英詩からは解り難いことかも知れないが、ツレである若女が、九十日間の夏安居（少将の小町への百日間のコートシップに対応する）に道を見出だそうとしている僧に対するセラピストたる役割を果たしているようであり（ニコラス・ティール氏）、パウンド訳を対象とする本稿と直接関わりはもたないとも考えられるが、この物語に重層的な深みを与える魅力的な解釈であると思われるので付記しておく。

あまりの飛躍と思われるかも知れないが、イブを愛することで自ら楽園を追われることを選択したアダム、クリセイデの背信に絶望して敢えなく戦場の露と散り果てたチャーサーのトロイラス<sup>8)</sup>、キャサリンへの妄執とともに亡んだヒースクリフ等、古今の西洋の物語には、所謂「悪女」に翻弄され尽くす男性像を数多く見出だすことが出来る。そして四位の少将も又彼らと同じく、リアリスティックな主人公と考えることは難しい。だが、そのような設定、性格づけの故にこそ、我々全てがもつ求不得・愛別離の苦しみをより見事に極限まで演じ切ってみせてくれると言えよう。

現代では少数の愛好者にのみ、主に謡のテキストとして用いられている観のある謡曲であるが、エズラ・パウンドを始めとする幾多の優れた英米の文学者が、その全く異なる土壌に移植して花開かせた成果をみても明らかのように、実際に能楽堂まで足を運ぶことが出来なくても、観阿弥・世阿弥親子によって既に日本の中世において洗練と完成をみている能は、読んで楽しむことの出来る文学でもあるのである。

蛇足であるが、出自も明らかでない小野の小町という人物は、その残された数少ない和歌からは、男の愛を弄ぶサディスティックな女性というより、優しく誠実な人柄が想像されることを付記しておきたい。

## 注

\* 本稿は、一九八六年、筑波大学大学院教育研究科、日米比較文学演習における英語による口頭発表をもとに今回新たに纏めたものである。得難い助言と示唆とそして深い理解を戴いたニコラス・ティール先生に心から感謝申し上げたい。また、原稿に目を通して下さった岩元巖教授に深謝申し上げる。

1) 小野の小町に纏わる様々な伝説を素材とした「小町もの」と呼ばれる能は、廃曲となったものを除いた五曲あるが、その一つ（松田存「能と古典文学」、公論社、一九八一年、四七ページ）。四位の少将をシテとする唯一のもの。

- 2) テキストは, Ezra Pound and Ernest Fenollosa, *The Classic Noh Theatre of Japan*. (Westport, Connecticut : Greenwood Press, 1977, c 1959), pp. 16~21 を使用したが, 最初の出版は一九一六年, ダブリンで行なわれた。
- 3) ニコラス・ティール氏の見解による。パウンド自身の注においては, イェーツ氏がアイルランド・アラン島に類似の伝説が残っていることを話してくれた, とある。
- 4) シテたる少将が第二場で初めて登場して, 第一場はワキ僧とツレ女(小町)との掛け合いに終始している構成の珍しさも亦, オリジナルの「通い小町」においては指摘されているが, パウンドの詩ではその分裂もあまり目立たない。
- 5) Roy E. Teele, "Kayoi Komachi, The Nightly Courting of Komachi," *Texas Quarterly*, Summer 1964.  
ロイ・ティールの英訳はオリジナルの曲にあわせて謡うことが出来るよう, 巧妙精緻に工夫されている。
- 6) "Komachi and the Hundred Nights (KAYOI KOMACHI)," tr. by Aileen Kato in *Twenty Plays of the No Theatre*. ed. Keen, D. (with the assistance of R. Tyler) from Hoshō Texts, Columbia Univ. Pr., 1970.
- 7) 里井陸郎「謡曲百選(上) — その詩とドラマ —」(東京, 笠間書房, 昭和五四年), 一六一ページ。
- 8) 「トロイラスとクリセイデ」の最後の部分のスタンザのうちのあるもの(例えば, Book 5. stanzas 250, 259, 260-1, 263)において, チョーサーの語り手がその殆ど仏教的世界観ともいべきものを吐露していることに日本の読者は一驚するのである。